

第2回特別展

明治時代を鑄^{やぶ}んだ職人の技――

独立行政法人国立印刷局

Banknote and Postage Stamp Museum

解説書

紙幣寮とは？

明治4(1871)年7月27日に、大蔵省内に設置された紙幣司が現在の独立行政法人国立印刷局の前身で、翌月には官制改革のため紙幣寮と改称されました。

創設当初の業務は、紙幣の発行・交換、国立銀行(民間銀行)の認可と育成など通貨行政事務全般でしたが、明治5年1月より切手、翌年には紙幣・公債・印紙の製造監督業務も加わりました。

紙幣寮は事務を執り行う部署であったため、製造については、民間の銅版画師が担っていました。

当時、紙幣寮の原版製作には、腐蝕凹版の技法が採用されていました。腐蝕防止剤を塗った金属の板の上に針で数字や図柄を描き、その箇所を薬品で腐蝕させて画線を彫る方法です。このような彫刻技術が不可欠であったため、銅版画師は欠かせない存在でした。

御用銅版画師について

御用銅版画師とは、紙幣寮から発注を受け、製品に関する銅板原版の製作と印刷を請け負っていた民間の銅版画師のことを指します。この御用銅版画師として、玄々堂2代目松田敦朝(緑山)、梅村翠山、柳田龍雪、中村月嶺が活躍しましたが、従事した期間は数年間と短いものでした。

松田と梅村が紙幣寮を離れる大きな理由となったのは、「手彫り」という製作方法にありました。公共性の高い製品には品質の均一性が強く求められますが、日本では版面の複製技術が未熟で、すべてが手彫りであったが故に品質に隔たりがあり、偽造品が横行する大きな問題が起きました。政府は偽造防止に対応するべく、紙幣の製造を外国に発注するなどの対策を取りました。

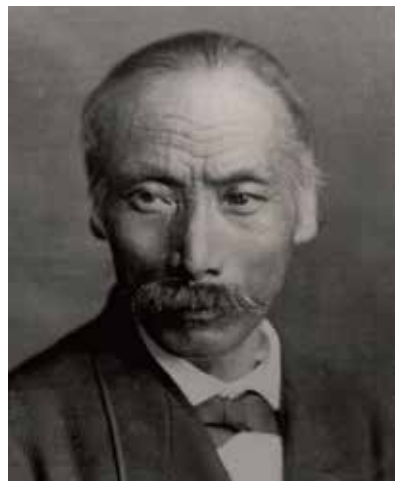
明治7年、3代目紙幣頭^{しへいのかみ}に就任した得能良介^{とくのうりょうすけ}は人員の刷新を図り、イタリア人彫刻家のエドアルド・キヨッソーネを招聘し、製品製造を託しました。これにより、紙幣や切手などの製造が民から官へと移行し、御用銅版画師たちはお役御免となりました。

一方でキヨッソーネは、ヨーロッパの印刷技術を日本にもたらすとともに、多くの人材を育て、紙幣寮の製造技術の向上に貢献しました。

ヨーロッパの技術の導入により紙幣寮を去ることとなった御用銅版画師たちでしたが、彼らは紙幣寮の黎明期を支え、日本における紙幣や切手の製造という重要な事業を担い、その礎を築くために大きな役割を果たしました。彼らの活躍を詳しく見て行きましょう。



明治9年に落成した紙幣寮の印刷工場を描いた錦絵
三代歌川広重画
明治10(1877)年
『東京名所 常盤橋内紙幣寮新建之図』



得能良介
文政8(1825)年旧暦11月9日
～明治16(1883)年12月27日

松田緑山

プロフィール

紙幣寮から任命された最初の御用銅版画師は松田儀十郎敦朝(緑山)です。京都の銅版画舗「玄々堂」初代松本保居^{まつもとやすおき}の長子として誕生した敦朝は、幼名を亀之助^{らんとうてい}、後に儀十郎敦朝を名乗りました。緑山は号で、ほかに蘭香亭、清泉堂などが確認されています。

13歳の頃には松田姓を名乗り、既に優れた彫刻技術を習得していたとされ、幕末には、各藩の求めに応じて水戸藩や高知藩、摂津高槻藩の藩札原版を製作していました。

紙幣寮での活躍

藩札^{ちやうへい}原版を製作した経歴と技術が認められて、慶応4(1868)年閏4月、太政官楮幣局より10両から1朱まで、5種の金札(太政官札)原版製作の命を受け、京都銀座跡地にて初の全国共通紙幣「太政官札」の製造に携わりました。さらに明治2年、「民部省札」製造の要請を受諾したことから、弟の龍山や多くの門人と共に上京、京橋区呉服橋傍に「玄々堂」東京出張所を設け、東京での仕事を開始しました。同年9月に民部省札を製造、翌年11月には大蔵省出納局からの通達により、初の郵便切手「龍文切手」を、明治4年4月には蚕種印紙、振出手形、9月には大蔵省兌換証券を製造するなど、有力な請負人として活躍しました。

彫り等の特徴

父・保居が得意とした「微塵銅版彫刻」技術を受け継いでいます。微塵銅版彫刻とは、精微精密を旨とし、小さな銅板面に極小の文字や細密な線描による彫りの特徴としており、3センチ四方の小さな面積に千字文を彫るほどの超絶技巧です。太政官札、民部省札、大蔵省兌換証券など、松田が携わった原版は、腐蝕凹版で製造されました。

お役御免のあと

紙幣寮を去った緑山は、銅版石版工房「玄々堂」を主宰し、若手の育成に尽力しました。松田の門からは、のちに明治洋画壇を代表する画家・高橋由一や、日本初のグラフィック雑誌『風俗画報』を創刊した出版社東陽堂社主・吾妻健三郎などを輩出しました。



松田敦朝(緑山)
天保8(1837)年旧暦3月10日～明治
36(1903)年10月31日(郵政博物館蔵)



太政官札 金10両
慶應4(1868)年



民部省札 金2分
明治2(1869)年



龍文切手 48文
明治4(1871)年



大蔵省兌換証券 金5円
明治4(1871)年

梅村翠山

プロフィール

梅村翠山(天保10<1839>年～明治39<1906>年)は、京都の玄々堂松田緑山に比肩する、明治時代初期の銅版界の第一人者です。明治6年2月、政府は紙幣寮の製品製造の請負を玄々堂が独占していたことを改め、梅村もこの任を担うことになり、印紙や切手の原版製作に関与しました。

梅村は、上総国武射郡南蓮沼村(現在の千葉県山武市)に生まれ、本名は亥之吉で、慶岸堂、不識庵などと号しました。梅村の彫刻技術は独学によるもので、師の存在は明らかになっていません。しかし、10数年後には高い水準の銅版彫刻技術を習得し、嘉永の頃になると、諸藩から藩札の版下彫刻の依頼を受けるほどの高度な技術を誇りました。

梅村は万延元(1860)年頃、江戸神田小柳町の木版彫刻師で、字彫りの名人であった三代目木村嘉平※1に入門し、版木彫りのほか明朝文字について指導を受けました。さらに幕末の江戸にて西洋木版による作品を製作するなど、紙幣寮に奉職するに足る活動を見せていました。

明治4年、梅村は神田弁慶橋福田町に印刷会社「夷白堂」(のちに「慶岸堂」と改称)を開きました。明治6年から松田緑山とともに紙幣寮の御用銅版画師となると、会社は大勢の門人を抱え、隆盛を誇りました。松田と同じく明治7年10月に紙幣寮を離れ、明治19年には印刷業界から引退し、宗教家としての生涯を全うしました。

手彫り技術等の特徴

銅版画師である岡田春燈斎※2と作風の類似が指摘されており、精微精密な彫りと、写実的な視点を持つところに特徴があります。

お役御免のあと

紙幣寮を離れた梅村は、銀座4丁目に「彫刻会社」を設立しました。アメリカから石版彫刻師オットマン・スモリック、石版印刷師チャールズ・ポラードを招聘した、最初期の本格的な石版工場でした。2人の招聘には、『團圓珍聞』印刷室長の小室誠一が当たりました。同誌の表紙は彫刻会社が手掛けています。



『團圓珍聞』第1号 表紙
明治10(1877)年3月創刊 団団社
明治期に活躍したジャーナリスト野村文夫が明治10年3月に創刊した時局風刺雑誌。「新聞」をもじって「珍聞」としたと言われています。表紙下欄外に、梅村翠山が主宰した「彫刻会社鉛製」とあります。



※1 文政6(1823)年江戸神田小柳町生まれ。18歳で家業の木版師3代目「木村嘉平」を継ぎ、精巧な木版字彫りで名を成す。島津斉彬の委嘱で鉛製活字を考案製造し、日本における嚆矢となった。明治19(1886)年没。

※2 京都生まれ。生没年不詳。銅版画師として弘化4(1847)年から安政(1850年代)頃まで活躍し、京名所など多くの作品を残した。松本保居の門人とも言われる。

紙幣寮 御下絵上納覚 御用控

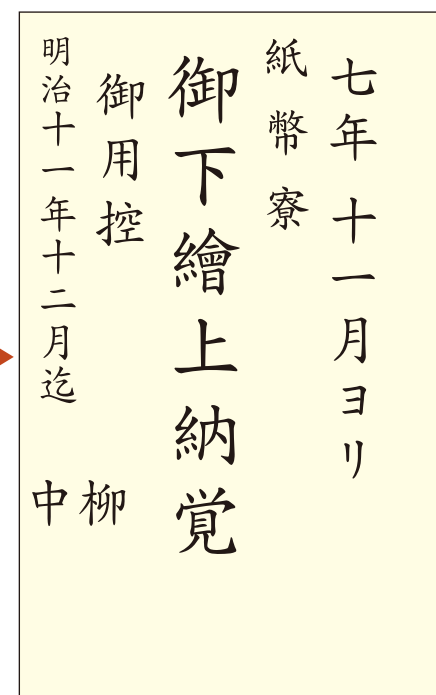
「紙幣寮 御下絵上納覚 御用控」とは？

紙幣寮から受注した内容を中心に書き留めた記録帳です。裏表紙には「南新(か)町3番地 中村月嶺」とある一方で、表紙には「柳」と「中」とあり、柳田龍雪と中村月嶺を示していること、筆跡が複数あることから、柳田と中村による記録、または門人や雇用していた人物が記した可能性があります。したがって、中村月嶺が受注した内容の記録帳であるものの、本人以外も記入に携わったと考えられます。

中村月嶺は、松田緑山と梅村翠山が紙幣寮を離れた後、彫刻師として奉職した人物で、「お釈迦さん」の愛称で親しまれた紙幣寮の人気者でした。



表・裏表紙を含む全46丁
60mm×115mm×17mm



記録された内容

「紙幣寮 御下絵上納覚 御用控」の表紙には、七年十一月ヨリ明治十一年十二月迄とありますが、実際には明治19年1月までの受注内容が記されています。中村月嶺は明治8年12月に紙幣寮を辞し、明治9年12月に銅版彫刻印刷会社「晴雲閣」を創業しているため、以降は、月嶺の会社の請負記録となります。

記録の内容は、具体的な受注の詳細、作業分担、製作期間、出勤表、俸給表など多岐にわたり、御用銅版画師の具体的な仕事の内容をはじめ、出勤日数や給与など、待遇の実際を把握することができます。

南新(か)町三番地
中村月嶺

柳田龍雪

プロフィール

柳田龍雪（天保4〈1833〉年5月28日～明治15〈1882〉年）は、刀具彫刻を生業とした父柳田鉄之助の子として現在の鹿児島県で生まれました。拓梁斎、一松斎と号し、馬場伊歳に絵を学び、文久元（1861）年には藩のお抱え絵師となりました。

洋画勉強の命を受けて明治4年に上京、この時狩野派の絵師、狩野勝川院に入門しています。翌5月海軍省水路局へ入省、その直後に銅刻術修行のため英国に留学し、帰国後は水路局には戻らず、明治6年2月2日、九等出仕として紙幣寮に奉職することになりました。

「紙幣寮 御下絵上納覚 御用控」見どころ

柳田龍雪と中村月嶺は師弟関係にあり、月嶺は柳田門の中でも最も優秀な門人であったとされています。

【見どころ その1】

冒頭には、公債證書6組について、彫刻前の準備段階として、1000円、500円、100円、50円、25円、15円6種の表裏下図图案の詳細が書かれています（次頁㉠㉡）。

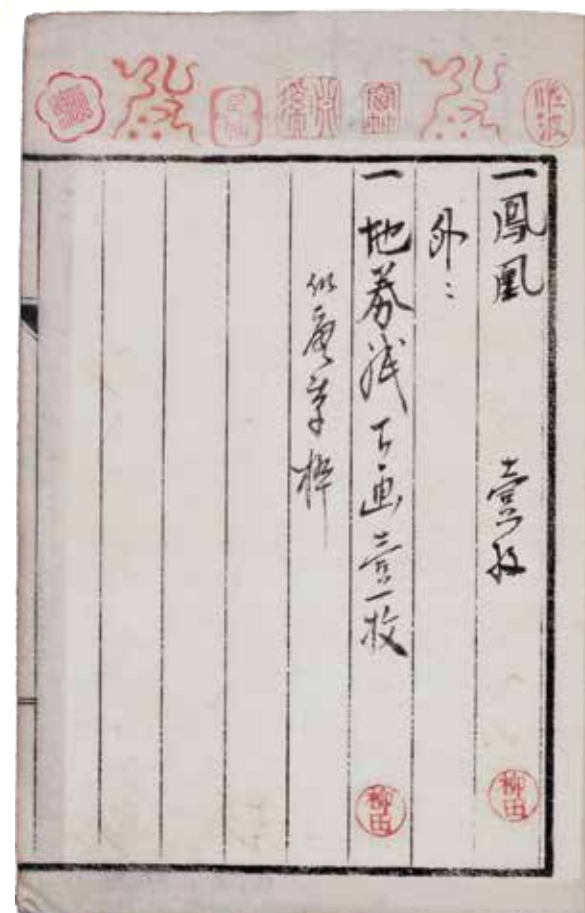
公債證書1000円、500円及び50円券は、それぞれ神功皇后、和氣清麻呂、鎌倉時代の武将・菊池武時などの人物を採用し、枠画紋、裏面の唐草など、高額券と50円券の3種は全て龍雪の手によるものです。また、100円、25円、15円券の主要な部分は龍雪が描き、裏面の唐草は月嶺が仕上げていることが明記されています。

【その2】

明治14年に発行された日本の紙幣史上初となる肖像は神功皇后ですが、明治7年の公債の图案に既に採用されていることが分かります。

【その3】

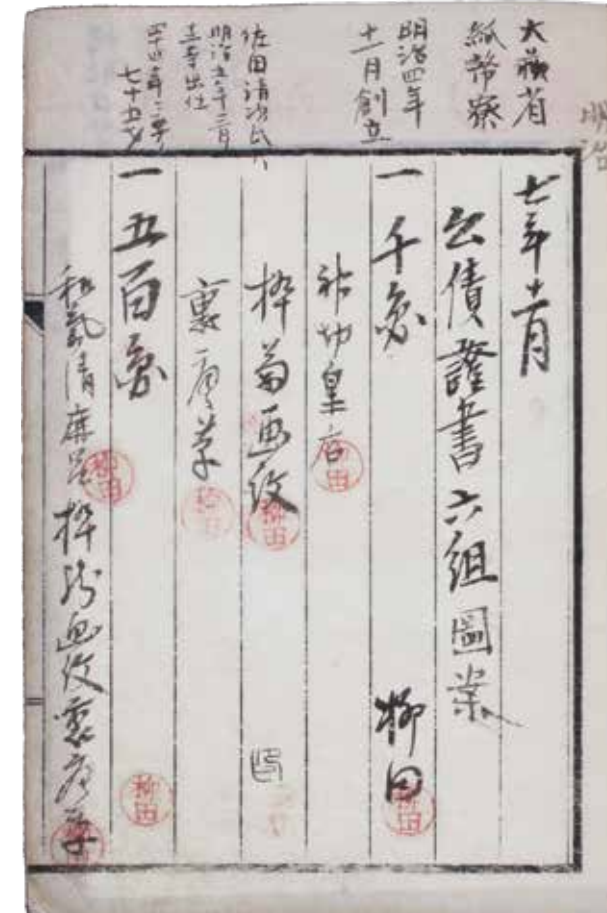
柳田龍雪と中村月嶺との師弟により、描く部分を分担しながら图案を仕上げていること、また、龍雪が担った製品である「鳥切手」のほかに、公債證書や地券紙の下画を手掛けていたという重要な事実が記されています（㉠）。



一鳳凰	壹枚
外	
一拾五圓	似唐草枠
一貳拾五圓	
一拾五圓	
村義光	



一百圓	得能良介氏
百圓	明治七年
一拾五圓	長官
一貳拾五圓	紙幣寮頭也
一拾五圓	
村義光	



七年十一月	大蔵省
公債證書六組圖案	紙幣寮
一拾五圓	明治四年
一貳拾五圓	十一月創立
一拾五圓	佐田清次氏
村義光	明治五年三月
	十二等出仕
	早稲三才
	七十五才

中村月嶺

プロフィール

中村月嶺は、唐木指物師だった中村英吉の長男として江戸中橋区南伝馬町に生まれました。本名は新太郎、月嶺は号です。

文久元(1861)年、狩野派の絵師樋口探月の門に入り日本画を学び、明治5(1872)年には紙幣寮彫刻局出仕の柳田龍雪の指導の下で銅版彫刻印刷の技術を修めました。紙幣寮に入る前は、陸軍省東京鎮台第一軍営の臨時雇になり、写図の仕事に従事していました。

明治7年11月、紙幣頭得能良介の改革で松田、梅村両名が請負制度廃止によりお役御免となった直後、紙幣寮の職工となりました。「紙幣寮 御下絵上納覚 御用控」の表紙に、七年十一月ヨリ明治十一年十二月迄とあるように、この資料は、月嶺が紙幣寮で仕事を始めた直後からの記録となっています。

紙幣寮を辞した後、月嶺は明治9年京橋中橋広小路6番地で「晴雲閣」と称する銅版・石版印刷所を創業し、76歳でこの世を去りました。



中村月嶺(新太郎)
弘化3(1846)年9月5日～大正11(1922)年1月19日
成瀬麟、土屋周太郎編
『大日本人物誌』一名 現代人名辞典より転載

「紙幣寮 御下絵上納覚 御用控」見どころ

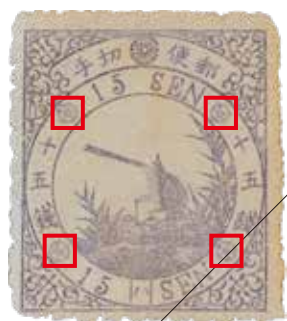
明治6年、日本とアメリカとで締結された「日米郵便交換条約」に基づき、日本の切手で外国に郵便物を送ることができるようになったため、明治8年1月1日、国際郵便向けの普通切手、通称「鳥切手」3種が発行されました。この鳥切手は手彫切手最後の製品で、以後原版彫刻以下一切の工程を政府が直接行うことになりました。



鳥切手 12銭 中村月嶺 鐫 明治8(1875)年	
鳥	雁
色	薄紅
額面	明治9(1876)年から減額が約束されていた対米向け基本料金に対応した額面
御用控の表記	桐葉(筋陰) 桐花 桐葉(陽)
実際のデザイン	葦に変更

【見どころ その1】

郵便12銭、15銭、45銭と記述があり、明治7年11月中の記録であることから、具体的な製品の名前は見られませんが、額面3件と製作年月から「鳥切手」3券種の図柄に関する記述と理解できます(次頁㊟)。



鳥切手 15銭 中村月嶺 鐫 明治8(1875)年	
鳥	せきれい 鶴鶴
色	淡紫色
額面	対米向け基本料金
御用控の表記	左下桜
実際のデザイン	4箇所の桜に変更

【その2】

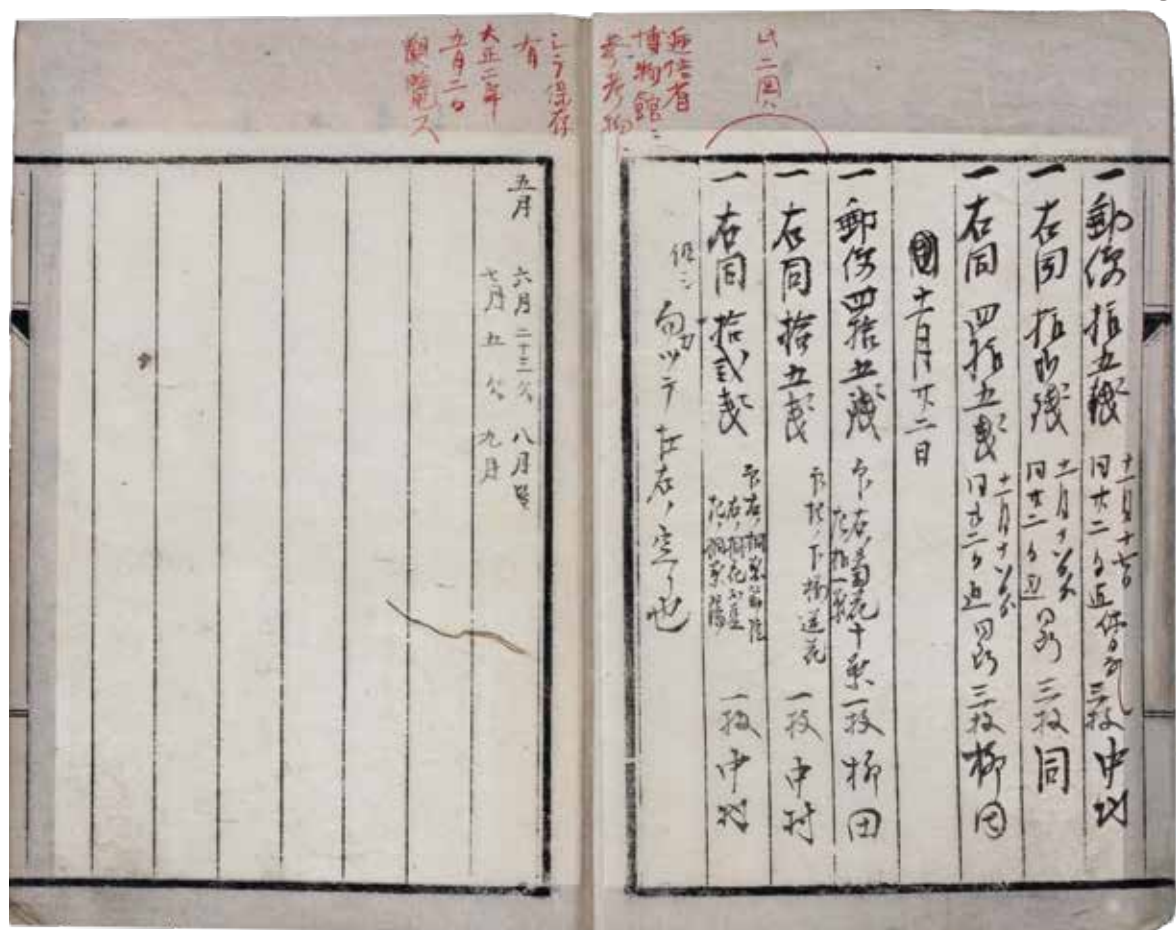
45銭切手は柳田龍雪、15銭切手と12銭切手は中村月嶺が担い、ここでも師弟による製作であることが示されています。



鳥切手 45銭 柳田龍雪 鐫 明治8(1875)年	
鳥	鷹
色	紅
額面	やや重い対米向け書状、書留料金
御用控の表記	右の菊花十葉 左十一葉
実際のデザイン	御用控と同じ

【その3】

飾り模様の具体案が示されています。実際に発行された切手とはデザインが異なっていることが分かります。



五月 六月二十三日 八月 九月 十月 十一月 十二月	
一郵便拾五銭 同廿二日迄 休日なし 中村	
一右同拾貳銭 同廿二日迄 同断 三枚 同	
一右同四拾五銭 同廿二日迄 同断 三枚 柳田	
十一月廿二日	
一郵便四拾五銭 印 右ノ菊花十葉一枚 柳田	
一右同拾五銭 印 左ノ下櫻逆花一枚 中村	
一右同拾貳銭 印 右ノ桐葉筋一枚 中村	
但シ 向カツテ左右ノ定リ也	

『英國龍動新繁昌記』

『英國龍動新繁昌記』挿絵

「紙幣寮 御下絵上納覚 御用控」には、「歌曲館演劇之図」とする記述があります(次頁㊦)。図㊦は、明治11(1878)年に刊行された『英國龍動新繁昌記』第2巻に所収されている挿絵です。

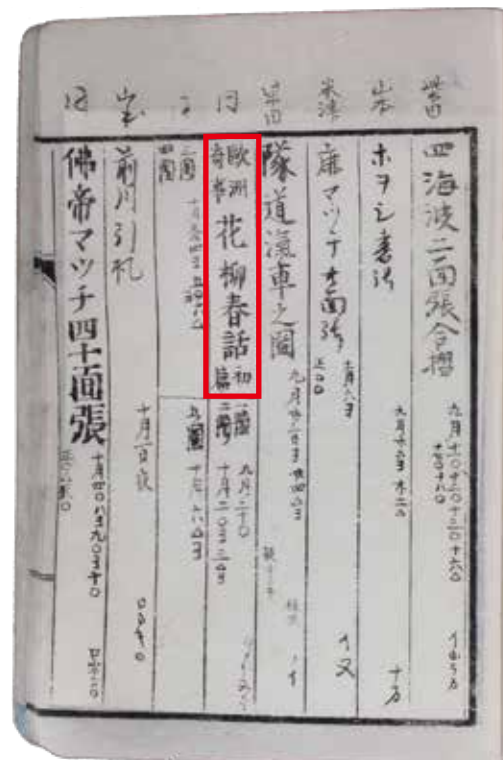
御用控は、明治9年の記録から、受注した仕事に対する報酬の記述が始まります。書籍の発行から約5カ月後に「歌曲館演劇之図」受注の記載が見られるのは、報酬を受け取った日にちによるものであると考えられます。明治9年は、月嶺が銅版・石版印刷会社「晴雲閣」を創業した年にあたり、収入の記録は「官」から「民」へと転身した月嶺の實際を物語っています。

『英國龍動新繁昌記』とは？

明治時代に刊行されたロンドン案内書です。訳述者の丹羽純一郎(1851ー1919)は京都生まれ。イギリスで政治と法律を学び、帰国後に本書を刊行しました。作品文中の随所に留学体験が挿入されています。丹羽はまた、明治11年10月には『歐洲奇事花柳春話』(Edward Bulwer-Lytton著)を刊行しました。この作品は、日本で最も早く翻訳されたイギリスの小説で、御用控に記載があります(㊦)。

見どころ

『英國龍動新繁昌記』第2編「劇場」項には、イギリスでの演劇に関する歴史的記述があります。本文では舞台の幅、緞帳、ボックス席など、当時の日本では見ることが難しいイギリスでの劇場の様子を描写し、挿絵で視覚化しています。



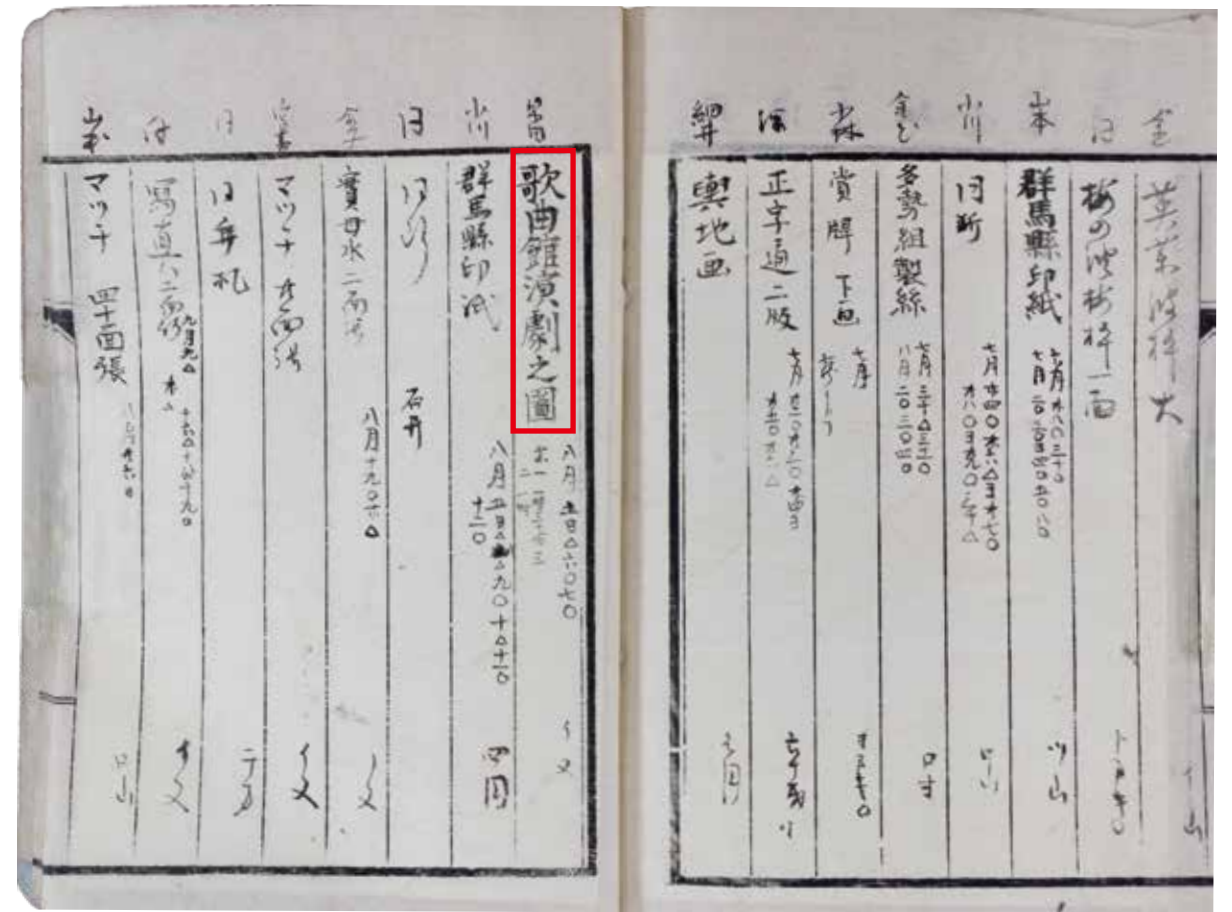
欧州奇事 花柳春話初篇



挿絵 歌曲館演劇之図

『英國龍動新繁昌記』第2編
ジョン・マレイ著／丹羽純一郎訳述
明治11(1878)年3月

㊦



柴田	小川	金子	宮嘉	同	同	山本
歌曲館演劇之図	群馬縣印紙	同断	實母水二面張	マッチ廿面張	同□札	写真二面張
八月五日△六〇七〇 第一一時三十分三 十二〇	八月五日△六〇九〇△十一〇	石井	八月十九〇廿△	九月九△ 十六△十八△十九〇 廿△	九月九△ 十六△十八△十九〇 廿△	九月九△ 十六△十八△十九〇 廿△
イ又	四円		イ又	イ又	イ又	イ又
英菓波粹 大	梅の油(か)梅粹一面	同	群馬縣印紙	同断	小川	金本
イ山	ト乃キ口	ツ山	口山	口寸	す乃キ口	六十美
壹円						

エドアルド・キヨッソーネ

プロフィール

エドアルド・キヨッソーネ (Edoardo Chiossone) はイタリア北西部に位置するジェノバ市アレンツァーノ村の出身で、裕福な商店主の息子として誕生しました。14歳の時に美術学校に入学し、卒業後はアトリエ等で技術の研鑽を積み、29才でミラノ王立ブレラアカデミーの名誉会員になりました。紙幣寮での仕事を終えた後も日本に留まり、明治31(1898)年、麹町区平河町の自宅で死去、65才でした。

紙幣寮での活躍

明治2年より松田緑山一門が担い続けてきた公共性の高い製品製造の技術は、江戸時代以来の製造方法とほとんど変わらず、偽造に悩まされるようになりました。政府は新しい印刷技術を持つ海外へ紙幣の製造を求め、ドイツのドンドルフ・ナウマン社と契約を結び、大量の紙幣を発注しました。この時、同社で日本の紙幣製造に携わっていたのがエドアルド・キヨッソーネで、そのことが来日のきっかけとなりました。

キヨッソーネは明治8年に来日し、以後16年間にわたる勤務の中で、当代の紙幣、切手、国債、証券類の版面を製造しました。また、明治天皇、明治の元勳の肖像画も手掛けています。

キヨッソーネは、「エングレービング」と呼ばれる直刻彫刻の技法や、当時最新の製版法であるエルハート凸版、電気分解を利用して印刷版を複製する電胎法により、正確で均質な複製版の製作を可能にするなど西洋の新しい印刷技術を日本にもたらしました。

キヨッソーネには、来日の条件として日本人技術者に彫刻技法を伝授するミッションが課されていたため、参考資料として多くの銅版画作品を携帯し、紙幣寮に着任しました。

その後、キヨッソーネは彼の彫刻技術を継承する多くの弟子たち—ふるやぎんじろう ほそがいためじろう おおやますけいち降矢銀次郎、細貝為次郎、大山助一—等を育てるとともに、その成長を見届け、改造兌換銀券100円券の原版彫刻を最後に、紙幣寮を退職しました。



エドアルド・キヨッソーネ
1833年1月21日～1898年4月11日



「本を手に持つ男」
(ジュゼッペ・ロンギ彫刻)
キヨッソーネが教材として
持参した銅版画作品の1つ

【参考文献】

大蔵省印刷局『大蔵省印刷局百年史』第1巻 大蔵省印刷局 1971年

西村貞『日本銅版画志』書物展望社 1941年

青木茂編『梅村翠山氏ノ銅版画術沿革談』『印刷雑誌』第2巻第8号 1892年

神奈川県立近代美術館『幕末維新の銅版画 玄々堂とその一派展 絵に見るミクロの社会学』1988年

お札と切手の博物館『平成29年度第2回特別展 日本近代紙幣の礎となった男たち—明治150年印刷局はじまり物語—』2017年

大蔵省印刷局博物館『お雇い外国人 エドアルド・キヨッソーネ没後100年展』1997年

森登『江戸・明治の視覚 銅・石版万華鏡』

天理大学附属天理参考館編『天理ギャラリー第127回展 幕末明治の銅版画 —玄々堂と春燈斎を中心に—』2006年

2026年

1月14日(水)～3月8日(日)

令和7年度第2回特別展

紙幣寮の銅版画師

— 明治時代を鏤んだ職人の技 —

発行日 令和8年1月14日

編集・発行 独立行政法人国立印刷局 お札と切手の博物館

〒114-0002 東京都北区王子1丁目6-1

TEL 03-5390-5194

本書掲載の内容を許可なく複写、複製、転載することを禁じます。